



夏目漱石の病歴と生活（六）

広島文化学園大学大学院看護学研究科

森下 恭光

■ 緒言

第六稿となる本稿の主題は、大正元年末より大正二年末日に至るまでの夏目の病歴と生活の実態を究明することにある。この間の病歴としては、大正元年末頃より始まり、翌二年の半ばまで顕著に見られたとされる神経衰弱と三月末に再発し、約二カ月療養（入院はしない）することになった胃潰瘍がある。

また、生活面では、大正元年十二月より朝日新聞に連載が始まり、途中大正二年四月より九月までの中断を経て十一月に終結する『行人』の執筆が第一にあげられ、第二には、大正二年に目立つ絵画制作とそれとのかかわりで展開する画家津田亀次郎（青楓）との親交があげられる。

これらの点についての論及にあたり用いる素材は、病歴については鏡子夫人の回想録『漱石の思ひ出』、漱石自身による日記、書簡、それに加え、医学者千谷七郎の見解（『漱石の病歴』に示される）を主なものとする。

生活については、夏目が『行人』執筆前後にとった言動を中心に、夏目自身による書簡と鏡子夫人の回想（『漱石の思ひ出』）を主な素材として究明する。夏目の執筆活動の外に注目すべきこの時期における活動としては書画の制作があり、とくに絵画制作は画家津田亀次郎との親交に象徴される。この点についての素材は夏目の書簡（津田に宛てたもの）が主なものとなる。夏目の絵画制作については、その作品の図録も意味あるものと考えられるが、大正二年に制作されたものの図録はきわめて少なく、資料としての意味は限界があるので割愛する。

■ 大正二年前半の漱石

前年（明治四十五年、大正元年）には、明治天皇崩御（明治四十五年七月三十日）があり、更にその前年（明治四十四年十一月二十九日には、五女雛子を原因不明の病気で失っている夏目は、自身の病気（明治四十四年八月より九月に至る湯川胃腸病院における胃潰瘍の入院治療、つづいて佐藤病院における痔の手術）もあり、大正二年を迎えて年は変わっても、心身の状況は決して安穏なものではなかった。

その上、前年の十一月三十日には、『行人』を起稿していることが十二月一日付で中村蕪に書き送っている書簡の文面に「昨三十日夜漸く一回認め社へむけ発送致置候」¹⁾とあることで確認されることにより、創作という精神的負荷のきわめて高い作業に取りかかっている時期とも重なるので、心身の状況に相当の深刻な変化が起こることも予想される。

夏目夫人鏡子の回想によれば、「この年は正月から六月までが一番ひどくって、挙句の果てはとうとう又もや胃を悪くして寝込んでしまいました。胃が悪くなるとそれでだんだん頭の方はなおって来るのですが、この時は始めは両方でしたから、ずいぶん大変でございました。」²⁾という状況であった。

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

夫人によれば、妻や子ども、そして使用人に対する理不尽な言動、とくに暴力を伴うものまであり、耐えかねた使用人が次々とやめて行くという事態まで発展する。それにもかかわらず本人には自覚が乏しく専ら攻撃は他者に対して向けつづけ、ついには、「いつもの式で、又も別れ話です。しかし今お前に出て行けといっても行く家もないだろうから、別居をしる、お前が別居するのがいやなら、おれの方から出て行くところです。」³⁾

まさに理解に苦しむ夏目の言動ではあるが、そのような事態をも夫人は「この時もかなりひどくもありましたが、外国からかえって来てからの時に比べれば、余程おだやかになっておりました。そうして病気の間も短うございました。」⁴⁾と回想する。

ここに対比されている外国から帰って来た時とは、夏目がイギリス留学（約2年間）から帰国した明治三十六年を指し、帰国直後から顕現した神経衰弱は七月に至って極度に達し、夏目は義父中根重一と相談の後、娘二人（筆・恒子）を連れて妻を義父の許へ帰す。別居は九月初旬までつづく。夏目の神経衰弱は、実はこの時点で始まったのではなく、留学中の明治三十四年の秋より始まり、帰国した翌年の明治三十七年中頃までつづくことになる。

したがって、この時は別居にまで至らなかったこと、結果的に大正三年暮頃におさまったことで、前回に比べれば、おだやかになっていた上に、期間も短かったということになる。

一方、夏目自身はこの時期、自身の心身の状況をどのようにとらえていたか。

それを探る手段としてはこの時期に発信された書簡が有力である。

この年（大正二年）夏目が書簡を最初に認めたのは、いわゆる修善寺の大患（明治四十三年八月）の折に治療を受けた医師森成麟造に宛てたもので、一月七日付で発信されている。当時新潟県高田市に居住していた森成に送ったその書簡に「今年の正月は諒闇⁵⁾中でののんきです。高田は雪がひどいでしょう。からだを大事になさい。私はまだ須賀さんの薬を呑んで居ります。」⁶⁾と記しているところを見ると胃病について自覚はあり、そのための薬を服用していることは明らかであるが、精神面にかかわる記述は見られない。

翌日の一月八日付で画家の津田亀次郎⁷⁾（青楓）に送った書簡には「小生も只今執筆中にて碌々外出も仕らず旨く書くにも好加減に書くにも困る方先へ立ち候次第にてすぐ拝見と申す訳にも相成かね候。」⁸⁾との記述がある。小説を送って来た津田へのいわば返信ともいべきこの書簡には、創作執筆（『行人』）にかかわる苦心を幾分の諧謔も込めて伝える内容が見られるが、それ以外の精神的苦痛に触れるものは見当たらない。なお、夏目が執筆中の『行人』は大正元年十二月六日より朝日新聞に連載が始まっていた。

二月八日に門下生内田栄造⁹⁾宛に送った書簡には、岡山名産の吉備団子を受け取った礼を記すのに「今朝少々風味致し候箱破れ中より団子ころがり出候処もつけの幸に御座候」¹⁰⁾の条があり、ここにも夏目得意の諧謔が発揮されている。そして、そこには精神的苦悩の表明は見られない。

三月十九日付で津田亀次郎に宛てた書簡の中では明治四十四年十二月二十九日に失った五女雛子の墓の図案を依頼しており、「普通の石塔は気に食いません。何とか工夫はないものでしょうか。」¹¹⁾と記し、愛児を失った親としての強い愛惜の念を示している。

三月二十八日付で中島六郎へ宛てた書簡には、音楽学校（現東京芸術大学）卒業式の切符を送ってもらいながら出席できないことを詫び、その理由を「天気模様と気分をあしきとそれや是やにて」¹²⁾と漠然とした表現ながら全身的不調をうかがわせるものになっている。

実際に、この時点における夏目の体調は相当に悪く、この日、朝日新聞掲載中の『行人』の「帰ってから」は休載されている。荒正人は、この頃（三月下旬）、夏目は三度目の胃潰瘍を発病し、須賀保医師の診察を受け、門下生の岡田（後に林原）耕三の世話を受けていたとする。¹³⁾

体調が執筆を続けるには、相当の困難を伴う不良な状態にあることを実感する夏目は、東京朝日新聞社の山本松之介宛に、四月二日付で「まだ原稿を書く頭がふらつくし。立つと足がふらつくし。胸も時々痛みますが。今日ためしに一回かきました。是があとずっとつづくよう御座いますがあとが危険ですからあなたの方の都合に出来るまで少し溜めて置いて出す譯には参りますまいか。まだ流動物で俊寛の如く存在致居候」¹⁴⁾と書き送っている。

この文面から夏目の体調が深刻な状況にあり、摂食物も流動物であることを知らされると、受信した

山本は当然のこととして、善後策を考えざるを得なかったであろう。朝日新聞の立場からすれば、夏目の連載の後は、夏目の門下生である中勘助の作品（『銀の匙』¹⁵⁾）が連載されることになっていたから、ここで夏目の『行人』が休載になっても、処置なし、という深刻な事態を迎えることはなかったから、当面は夏目の体調次第ということになったようである。¹⁶⁾

結局、夏目の『行人』連載は第三十八回の四月七日で一時中断となる。『行人』の連載が中断されることになった後に連載が開始されることになったのは、予め夏目の推薦により掲載が決定していた中勘助の『銀の匙』であった。

■ 漱石の作画専念とその意味

大正二年における夏目について、われわれの知り得ることで特筆すべきことに、夏目と書画という趣味の世界とのかかわりがある。

とくに、絵画と夏目の関係は深いものであったことを確認することができる。

大正二年中に発信した書簡の宛先で顕著に見られるのは、従来あまり見られなかった津田亀次郎という人名が頻繁に出て来ることである。年始から年末にかけて津田宛に発信された書簡の数は、16通あり、いわゆる門下生といわれる小宮豊隆、寺田寅彦、鈴木三重吉等に宛てたものより多い。宛名にあらわれたその特色は、門下生のいずれにも該当しない職業、つまり、津田のみが職業画家ということにある。そのことから、とくに、大正二年における強い関心は絵画にあったということが事実として確認される。

夏目夫人は夏目の行動傾向として、「頭が悪くなると絵をかく」¹⁷⁾ことをあげている。

夫人によれば「この時（大正三年）にもずいぶん絵をかきました。この病気が起こると側にいる私たちも困るのですが、第一自分も苦しいのでしょう。それを逃れる一つの方法が絵で写生風のものより、頭にあるものを勝手に描くというふうに見受けられました。中略。この頃しきりに描いていたものは、日本画とも水彩画ともつかない、みづえの紙に描いた妙ちくりんな絵でした。」¹⁸⁾この回想によれば、夫人は夏目が絵を画くのは、苦しさから逃れる方法の一つであったと確信していたということである。部外者、別表現を用いるなら家族以外の者には分からない、或いは、見ることの出来ない夏目の家庭内における日常を知る夫人の回想であるから、その内容は相当の説得力を持つ。しかし、それが確信という形で示されているものであっても一定の留保は必要であろう。

夏目夫人のいう「頭が悪くなると絵をかく」ということについて、それを確認する作業をするについては、客観的事実を示すものとして、大正二年に発信した夏目の津田宛の書簡があるので、それらを発信の時系列に従って内容を見て行く時に、まず、最初にあげるべきものは、三月十九日付のもので「光風会¹⁹⁾」を二度見ました。色々面白いのがありました。あなたの瓶に団扇は好いように思います其代海（ことに大きな方）は賛成致しかねます」²⁰⁾との記述が見られる。すでに触れたように、この時期、夏目は『行人』執筆中であり、体調も良好であったとはいえなかったにもかかわらず二度も展覧会場に出かけている。しかも、その他にも三月中旬にはフェウザン会第二回展覧会（三月十一日～十三日、読売新聞社で開催）も観ている²¹⁾というから絵画への関心度の高さは相当のものであったことが知れる。

四月は七日より『行人』休載に入ったことにより明らかなように身心共に不調で書簡そのものも2通しか発信していない。そこに津田宛のものはない。しかし、その五月の下旬に、津田は夏目宅を訪ね病中に描いた20枚ほどの絵を批評したという。²²⁾その夏目が、病床から解放され、外出をしたのは五月二十八日であったことが、そのことを告げる五月二十九日付の橋口清（五葉）宛の書簡で確認される。

六月に入ると、六月十一日付で津田に宛てて発信しており、文中に上野で太平洋絵画²³⁾を観、その折に観た津田の屏風について、布地に油絵具を用いたことを「下品で毒々しい感が残念でした」²⁴⁾と論評した上で、自身の作画については、「近頃は中々かけますよ三日に一つ位傑作拵えては一人で眺めています。水彩画展覧会の方も見ました。」²⁵⁾と例によって諧謔調を交えた上に幾分かの自信ものぞかせている。そして、水彩画展を観たことを書き添え、油絵具の洋画に加え、水彩画にも関心のあるところを伝えている。

六月十八日付の津田宛書簡には、小川千甕²⁶⁾（先生と敬称を用いている）の画を送ってくれたことに

謝意を示した後に、「私はあれから二三枚妙なものを画きました其うち一二枚必ず賞められなければ承知のできないものでいつか序の時又見て下さい」²⁷⁾と礼状として認めた書簡で自作の批評を乞うている。「必ず賞められなければ承知のできないもの」との文言は、自信というより津田に対する親密の情を伝えるものと解すべきであろう。

七月二日付の津田宛書簡には、冒頭に津田の父親の死を悼み、その後に「画は二三日前からやめました。あまりすさむと外の事が出来ないと思って紙の尽きたのを好機として切り上げました。」²⁸⁾と記している。しかし、その直後に、自画像を描いたことを伝え、「鼻もちならない自画像」²⁹⁾といいながら暗に批評を乞うている。その他にも日本画家や中国人画家の展覧会を見たこととその感想、さらには、七月一日に、古道具屋で軸を一幅買ったことも付け加えている。そして、文末に近いところで「今日古いスチューヂオを出して十冊はかり見ました。」³⁰⁾と記し、絵画への強い関心を抑制できない心境にあることを示している。

ここにいう「スチューヂオ」とは、“The Studio”というイギリスの美術雑誌を指し、小宮豊隆によれば、夏目の蔵書中に1901年以後のものが沢山あるという。³¹⁾1901年は明治三十四年に当たり、夏目がロンドンに留学している時期であるから、夏目の絵画への関心は、その頃から相当なものであったことがうかがえる。夏目の広義の美術への関心を示す事蹟としては、夏目のイギリス留学の途上にあたる明治三十三年十月二十二日の日記に、パリの万国博覧会を共に見るために浅井忠を訪ねたが留守であった為、他者の案内により観覧したことが記されている。³²⁾浅井忠はこの時期（明治三十三年～三十五年）東京美術学校教授としてフランスに留学中であった。十歳余り年長の浅井忠と夏目は美術を接点として、留学中、帰国後を通して親交があった。³³⁾浅井が没した明治四十年の翌年に行った講演『創作家の態度』の中では、浅井の人柄に触れ、その死を悼んでいる。³⁴⁾

夏目の蔵書に“The Studio”が1901年出版のものからあるのはこのことと無関係ではないであろう。

この後、夏目が津田に宛てた書簡の中で、八月十三日付、同月二十四日付の双方には津田の絵に対する批評はあっても自身の絵に触れる記述はない。九月二日付の書簡になると「あなたに見て貰った四枚の画は其後又手を入れました。よくなった積ですから来た時又見て下さい」との記述があるところから、画作の量はとも角として、画作は続いていたと察しられる。また、「そろそろ又専門の方でいそがしくなりそうです」³⁵⁾と書き添えているところから『行人』の原稿書きの始まりが暗示されている。

『行人』は「塵勞」と題して九月十八日から連載が始まる。そのためか、津田宛の書簡も自作のものについての記述はなく、他者の作品について率直な、時には辛辣な批評が展開されている。このことから画作の有無にかかわらず絵画、広くは美術への関心の強さは依然として強いことが確認される。

しかも、十月十五日付の書簡には、その末尾にあれから又竹の画を絹に描いて人にやりました」³⁶⁾とあることから、いかに執筆に専心している時期であっても絵筆を執らずにはいられない衝動の働きの存在をうかがわせる。いよいよ年末に近づく十二月八日の書簡に、「私は生涯一枚でいゝから人が見て難有い心持のする絵を描いて見たい山水でも動物でも花鳥でも構わない只崇高で難有い気持のする奴をかいて死にたいと思います文展に出る日本画のようなものはかけてもかきたくありません」³⁷⁾と記す。

ここに見られるのは夏目の目指す画境の表明であり、同時に自己の理想とする境地の表明でもあったと考えられる。このことから、夫人がいう「頭が悪くなると絵をかく」という時期に該当する大正二年に、画家である津田との接触が頻繁になっていることは、それが夏目の自己解放につながったことを示す事例ともとらえられる。しかし、「頭が悪くなる」という事実は、書簡の内容から察することはできず、夏目における病気の自覚は、あくまでも医者によって診断された胃潰瘍であり、夏目を襲う不快感はそれより派生するものとして認識していたのではないかとの推測も成り立つ。

夫人が精神状態が不安定で奇言奇行の多かったとする期間（一月～六月）の終期にあたる六月十八日付で勝又和三郎宛に送った書簡に「私の病状は先年と同じく潰瘍です血が沢山下りました。生きていますがいつ死ぬか分らないと思っています」³⁸⁾と書き、その末尾を「家内家族無事にくらして居ります。」と結んでいる。この書簡によっても、夏目の精神状況を夫人のいうように読み取ることは困難である。

■小説『行人』の制作環境

夏目の『行人』執筆中の身心の状態は、自身はいうまでもなく、その家族及び周辺に影響を及ぼし、同時に『行人』という作品自体にも反映することになる。

ここで既に論及したことに重なる部分のあることを承知の上で、敢えてその期間の病歴を整理しておく。

まず、『行人』を起稿したのは十一月三十日で、第一回分を東京朝日新聞社に発送。十二月二日、午前までに第二回を書く。十二月六日、『行人』は東京朝日新聞、大阪朝日新聞に掲載開始。十二月末、神経衰弱の徴候が顕著になる。それは、夏目夫人の回想に、「暮から妙に顔が火照っててかてかしているの、変だ変だと思っておりますと、又も例の頭がひどくなって参りました。」³⁹⁾とあることによって知られる。

翌年（大正二年）三月二十八日、『行人』の「帰ってから」が休載となる。須賀保医師により胃潰瘍と診断されたとおり著しい体調不良が理由。四月七日、いよいよ執筆困難となり、四月七日、『行人』は「帰ってから」までで一時中断。五月二十八日、病後初めて外出し、帰宅後床上げする。七月中旬（推定）⁴⁰⁾『行人』の執筆に着手。九月十六日⁴¹⁾、『行人』の「塵労」が東京朝日新聞、大阪朝日新聞に連載開始となる。

十一月十五日、『行人』の「塵労」第五十二回が完結し、全体で167回の長篇小説は完結する。

以上、『行人』執筆開始から完結までを時系列に従い、その間における病歴に注目しながら整理した結果として言い得ることは、『行人』の執筆という作業が夏目にとって決して好ましい環境（精神面、身体面の両面）の下になされたものではなかったということである。そのことと関連させるならば先述の津田との親交によって促進された作画という作業は、一種の自己表現による自己解放であり、同時に自己救済の手段であったと考えることができる。そして、その解釈は夫人のいう、「悪が悪くなる」という病気の苦しみから「逃れる一つの方法が絵であったことはたしかだと思います」⁴²⁾との回想を支持することにもなる。

ただし、夫人がいう「頭が悪くなる」という素朴な表現は、もちろん医学的な見識によるものではない以上、いかにその言動を身近に見、場合によっては被害ともいふべきものを受ける者としての発言であっても、そのままに全面的に肯定するわけにはいかない。

夏目の精神面における異常性について論究するばあい、それは従来、もっぱら直接に夏目の異常な言動に直接触れたものによってなされて来た。それは家族（妻、子）、使用人、親族によるものが圧倒的に多い。それに反して、直接に夏目に接する者の大部分を占める友人、そして、いわゆる門下生は、夏目の異常な言動に触れたことがないのか、あっても言明しないのかその点についての言及は極めて少ない。

夏目のこの時期について論述するに際して、ここまで筆者が素材として扱ってきたのは、夏目自身によって記された日記、書簡、そして、夫人による回想録『漱石の思ひ出』が大半を占めている。

その外に残された素材としては梶木剛が「漱石の狂気（傍点筆者）の正確な自己解剖の作品」⁴³⁾とする『行人』⁴⁴⁾があり、この『行人』を医学者としての知見に基づき夏目の病理の解明を試みた精神医学者千谷七郎著の『漱石の病跡』⁴⁵⁾がある。

以下に、夏目の『行人』執筆時の制作環境を『漱石の病跡』によって見て行くこととする。

東京女子医科大学精神神経科教授を務めた千谷が東京大学医学部の学生時代に彼の周辺で夏目の病気について神経医の見解として断片的に耳にしていたのは、早発性痴呆（今の精神分裂病）、或は迫害妄想、或は偏執狂との診断、或は分裂病とうつ病との混合精神病、或は病気ではなく異常人格の発展等々であったという。⁴⁶⁾ 著書名に見られる「病跡」という用語については、その概念を「或は傑出人の異常な性格特徴（H.Gyruhle）、或は精神病理学者の興味を惹く精神過程の側面（K.Jaspers）、そして、それが其の人の一生と作物とに与えた影響の跡を明瞭にしようとするバイオグラフィー（Biographie 伝記）の一形式」⁴⁷⁾とする規定によって説明している。

一医学生として夏目に関心を持つ千谷は周辺から伝えられる病名のいずれにも距離を置き、独自の手続きにより、夏目自身が神経衰弱といっているものは、内因性鬱病と診断すべきものであろう⁴⁸⁾、としている。この見解に立って千谷は、夏目の病跡を三期に分けてとらえている。

第一期は、その期間を明治二十七年夏頃から翌二十八年の初夏頃までの約一ヵ年とする。⁴⁹⁾ この頃、

夏目は東京帝国大学の大学院生として東京帝国大学寄宿舎に居住し、東京高等師範学校の英語教授嘱託であった。十月には法蔵院に居を移し、十二月から一月にかけて鎌倉円覚寺で参禅している。翌二十八年には東京高等師範学校を辞し、愛媛県尋常中学校教諭に就任している。初夏頃（第一回の終期）夏目は独身で、鏡子との婚約は十二月であった。

第二期は、英国留学第二年目の明治三十四年秋頃より明治三十七年中頃までの、三年余りにわたる。⁵⁰⁾この間の事蹟としては、『文学論執筆のため一室に閉じこもり研究に専念するのが明治三十四年夏以降明治三十五年春頃まで。その年の九月以降勧められて自転車を稽古。日本で一時発狂の噂立つ。十二月帰国の途につく。明治三十六年、第五高等学校教授を依願免官。四月より第一高等学校、東京帝国大学の講師に就任、同年七月頃、約二ヵ月間妻子と別居。十月、三女栄子出生。水彩画と書を始める。英語による散文を書き始める。五月、『帝国大学』に『従軍行』発表。

第三期は大正元年の晩秋から、二年、三年と約二ヵ年余りつづく。⁵¹⁾

この期間の主な事蹟としては大正元年の暮に始まり、中断を経て大正二年十一月半ばに及ぶ『行人』の執筆があげられる。大正三年は『こころ』の執筆があり、四月より八月まで連載している。九月には胃潰瘍の発病（四度目）がある。

千谷は内因性鬱病と考える病跡を以上の三期に分けて、それぞれの時期において内因性鬱病の症状とみなし得る具体的事例をあげた上で、第三期目の期間に創作された『行人』にこそ、最も象徴的症状が示されているととらえる。

■ 千谷七郎による『行人』分析

小説『行人』の内容構成について見ると、「友達」、「兄」、「帰ってから」、「塵労」の四編によって構成され、主要登場人物は、大学教授の長野一郎、その弟の二郎、一郎の妻の直、一郎の大学での同僚日さんである。

『行人』の主題は、典型的知識人で自我意識が強く鋭い長野一郎の内面的苦悩で、それは自我意識の強度に比例して深く、暗いものになる。当然の結果として、そのような苦悩は他者には理解されない。弟の二郎も妻の直も例外ではない。そのことが又、一郎の苦悩の深刻度を高めて行き、底の見えない闇が一郎の全人格を蔽い、一郎はそこからの脱却を模索するが容易に果たされない。

千谷は『行人』の主人公一郎の言動に夏目の精神状況の投影があるとの仮説の下に、一郎の言動をその周辺のかかわりを見つつ分析し結論として夏目漱石の病名を内因性鬱病とする。

分析の対象箇所とその主題となる要素は、『行人』の中身と題する章の次に掲げる見出しによって示されている。「孤独」－薄れ行く生き甲斐（生のリズムの遅滞）、痲癩と憂鬱の狂乱、ジョコンダの微笑、二種類の不安、精神的不安（煩悶）、生命的不安（苦悶）、居場所のない不安、頭と心の不知対立、徒勞な脱出の試み－「塵労」、宗教には這入れない、汎神論の破綻と芸術気質、芸術気質の背景、懷疑と「雲」。以上の見出しの下に、『行人』の内容を素材として夏目の病理の解明を試み、結論として内因性鬱病という病名に導くのである。⁵²⁾

精神神経科を専攻する千谷七郎が『行人』の分析によって得た結論は、いうまでもなく絶対ではない。しかし、千谷が「漱石自身は漱石自身の表現から観取するよりない」⁵³⁾として『行人』を分析する方法論は認められてよい。

十一月十五日に『行人』の「塵労」を書き終えた夏目は、その内容の深刻さを実際生活において見せているようには見えない。千谷のいう第三期目の鬱病期はまだつづいている時期にあることを考量するならば意外である。

しかし、それも夏目の一つの特徴と考えることもできる。十一月二十三日付の小宮豊隆宛の書簡には、「比頃は毎日出あるく事多く今日も新大橋から鉄砲洲築地などを通り桜田本郷町から虎の門迄あるき夫から電車で帰った処です。」⁵⁴⁾と記している。住居のある早稲田南町を起点とする行動範囲としてはかなり広域である。

これによって、精神面は不明としても身体面ではかなり体力も回復していることが推察される。さらに、

書簡の通数とその内容量も執筆中のそれに比較すると明らかに増加している。とくに、十一月五日には5通発信し、そのいずれも手紙である。その傾向は十二月に入っても見られ、十二月八日には、3通の手紙を発信している。

十二月十一日付で門下生の寺田寅彦に宛てた書簡には、病気の見舞いと慰めを記した後、「小生画をかくのと遊ぶのと運動するのとでいそがしく候画も明日はやめようやめようと思いながら其明日がくると急に描きたくなり候まあ酒呑がバーの前を通るようなものと存候其癖うまいものはかけず飛んだ酔興に候」⁵⁵⁾と記し、諧謔を交えたくつろいだ文面になっている。ことに、画作に関する文言は、その執筆ぶりが如実に伝わってくるものとなっている。

外部的活動としては、十二月十二日、門下生の安倍能成の強い要請を受け、母校の第一高等学校で講演を行う。演題は「無題」ということであつたが漱石全集収録の際に、「模倣と独立」⁵⁶⁾の題がつけられる。夏目が講演を行ったのは、明治四十四年八月以来のことで、その後体調を崩した上に、執筆活動で苦しみ、それが終了し休息期に入った時期であつたので快諾する状況になつた。十二月三日付で安倍能成に宛てた書簡には、当時の夏目の心境が率直に記されている。

「高等学校の講演は可成（注なるべく）やめに願ひたいが是非というなら今から一週間来週の金曜位に何かやる事に致しては如何演題は固より未定それ迄に苦痛ながら何か考える積です」⁵⁷⁾と記すことによつても明らかのように「やめに願ひたい」とか「苦痛」とかの文言により講演に気が進まない心境を訴えている。文中に来週の金曜日とあるのは講演の開催された十二月十二日に符合する。このような経緯で行われた講演ではあるが、約束通りそれを実行するところに夏目の誠実さを見ることが出来る。この年は十二月三十一日にかねて「東京新聞」への小説連載を依頼し承諾を得た志賀直哉に宛てて礼を述べた上で会見の日取りについて夏目に都合を問い合わせる志賀に対して、志賀の都合で決めてよいこと、又、来訪の際の道順など丁寧に書き送っている。⁵⁸⁾

■ 結 語

本稿によって明らかにし得た点として、次のことがあげられる。

まず、病歴については、胃潰瘍については医師が介在し、病名も診断によって明らかであり、それに対応する施薬もなされている上に、本人の自覚も明瞭であり、夫人の認識も一致しているので疑問の余地なく明らかにし得た。これに対して神経衰弱については、医師による介在が不明であり（この時期に限定して）、本人の明確な自覚も不分明であり、それに関連して夫人の認識は時には著しく異なる。そのことは『漱石の思ひ出』に如実に示されている。そのことで究明の手段として医学者千谷七郎の見解を用いたが、千谷は夏目を直接診察できる世代ではなく、止むを得ず『行人』を素材に病名を推察し、内因性鬱病との病名を挙げているので参考例としてこれを示した。

生活面については、『行人』の執筆活動が中心であるが、この点については、夏目の書簡によって創作の実態を明らかにすることができた。また、この時期に急速に高まった絵画制作への意欲は画家津田亀次郎に宛てた書簡等によって明らかにすることができた。また、美術に関する強い関心のあらわれは夏目のロンドン留学中にまで遡ることが出来ることも明らかになった。

注

- 1) 夏目漱石、書簡、漱石全集第三十卷所収、岩波書店、1980年、99ページ。
- 2) 夏目鏡子、松岡譲筆録、漱石の思ひ出、後篇、角川文庫、昭和三十六年、99ページ。
- 3) 同前書、105ページ。
- 4) 同前書、105ページ。
- 5) 林巨樹監修、現代国語例解辞典（第三版）、小学館、2001、1348ページによれば、天皇が、その父母の崩御のために服する喪とある。
- 6) 夏目漱石、書簡、前掲書、158ページ。

- 7) 津田亀次郎（青楓），明治十三年生，昭和五十三年没，画家，二科会創立等に関係，西川源兵衛（一草亭）は兄。
- 8) 夏目漱石，書簡，前掲書，159ページ。
- 9) 内田栄造（百間），明治二十二年生，昭和四十六年没，東大独文科に学び漱石門下生に数えられ『漱石山房の記』と作品多数。
- 10) 夏目漱石，書簡，前掲書，167ページ。
- 11) 夏目漱石，書簡，同前書，177ページ。
- 12) 夏目漱石，書簡，同前書，178ページ。
- 13) 荒正人増補改訂，漱石研究年表，集英社，昭和五十九年，745ページ。
- 14) 夏目漱石，書簡，前掲書，179ページ。
- 15) 『銀の匙』は，中勘助（明治十八年生，昭和四十年没）の出世作で夏目の推挙で朝日新聞に連載される。夏目は「珍しさと品格の具わりたる文章」と許す。
- 16) 小宮豊隆，夏目漱石，岩波書店，昭和二十四年，761ページ。
- 17) 夏目鏡子，松岡譲筆録，漱石の思ひ出，前掲書，105ページ。
- 18) 同前書，105～106ページ。
- 19) 荒正人，前掲書，744ページに明治四十五年結成，津田青楓，有鳥生馬も出品とある。
- 20) 夏目漱石，書簡，前掲書，177ページ。
- 21) 荒正人，前掲書，744ページにヒューザン会に関する記事がある。
- 22) 同前書，747ページに20枚ほどの絵の中で老子を書いたものを津田が高く評価した，とある。
- 23) 小宮豊隆，漱石全集，第二十五卷所収，日記・断片の泣解，岩波書店，1979年256ページに太平洋画会を解説し，明治三十五年に始まる洋画団体としている。
- 24) 夏目漱石，書簡，前掲書，188ページ。
- 25) 同前書，188ページ。
- 26) 同前書，271ページにある小宮の解説に，小川千甕，本名多三郎は浅井忠に学び，南画・俳画をよくしたとある。
- 27) 夏目漱石，書簡，前掲書，189ページ。
- 28) 同前書，190ページ。
- 29) 同前書，190ページ。
- 30) 同前書，191ページ。
- 31) 同前書，192ページ。
- 32) 夏目漱石，日記及断片上，漱石全集第二十四卷所収，岩波書店，1979年，13ページ。
- 33) 古川久，夏目漱石辞典，東京堂出版，昭和五十七年，6ページ。
- 34) 夏目漱石，創作家の態度，実業の日本社，大正五年，207～208ページ。
- 35) 夏目漱石，書簡，前掲書，206ページ。
- 36) 同前書，215ページ。
- 37) 同前書，130～231ページ。
- 38) 同前書，189ページ。
- 39) 夏目鏡子，前掲書，99ページ。
- 40) 荒正人，前掲書，571ページ。
- 41) 小宮豊隆，夏目漱石，前掲書，765ページ。
- 42) 夏目鏡子，前掲書，105ページ。
- 43) 梶木剛，狂気，夏目漱石辞典，別冊国文学 NO.39所収，学燈社，平成二年，129ページ。
- 44) 森田草平は，夏目は『行人』の主人公一郎に於て「自分自身を全体として，その欠点や短所と悪われるものまで含めて投げ出していられる。」（森田草平，続夏目漱石，甲鳥書林，昭和十八年806ページ）と記し，漱石理解に欠かせない作品としてとらえている。
- 45) 千谷七郎，漱石の病跡，勁草書房，1968年，1～262ページ。

- 46) 同前書, 3ページ。
- 47) 同前書, 230ページ。
- 48) 同前書, 24～25ページ。
- 49) 同前書, 25ページ。
- 50) 同前書, 32～33ページ。
- 51) 同前書, 44ページ。
- 52) 同前書, 75～198ページ。
- 53) 同前書, 7ページ。
- 54) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 221ページ。
- 55) 同前書, 222ページ。
- 56) 夏目漱石, 模倣と独立, 漱石全集第三十三卷所収, 岩波書店, 1980年, 102～127ページ。
- 57) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 228ページ。
- 58) 同前書, 234～235ページ。

追記

文中の引用文に用いられた旧漢字, 旧仮名は一部を除き新漢字, 新仮名に改めたことをことわっておきたい。